



「私たちには希望しかない」  
～イエス様を通して与えられる恵みの世界～

「その時、あなたがたはキリストなしに生き、イスラエルの国籍とは無縁で、約束の契約についてはよそ者で、世にあって希望を持たず、神もなく生きていました。しかし、以前はそのように遠く離れていたあなたがたは、今、キリスト・イエスにあって、キリストの血によって近い者となりました。」  
エペソ人への手紙2章12・13節[協会共同訳]

パウロはユダヤ世界からギリシャ世界に飛び込んで、ユダヤ発祥のキリストの教えを伝えていきました。もともと選民思想が強かったユダヤ教が源泉となっているキリスト教でしたから、どうしても、外国人にキリストの愛の教え、永遠の救いを伝えることに難しさがありました。どんな民族でも、自分たちの種族こそが優れていると思いたい部分があります。しかし、キリストの教えはその各部族の壁を乗り越えて「全人類」としての救いを願う創造主である神様の願いを伝えることに目的があるので、人間的な文化の壁や、考え方、習慣の壁をも乗り越えていかなければなりません。伝える側も伝えられる側も共に人間なので、その人が持っている価値観や人生観、人間観を通してキリストの救いの道を伝えてしまう現実が起こってしまいます。しかし、パウロはより偏見を持たずに、原理原則のみを伝えるように心がけました。だからこそ、どうしても理屈っぽい、複雑な言葉になってしまったのかもしれませんが。

キリスト教を外国の宗教と決めつけることなく、私たち人間をお造り下さった神様の思いとして、聖書のことばを素直にお聞きいただければ幸いです。私たち日本人を救うために自分の命を捨てて下さったイエス様のご愛を受け止めていただきたいと願います。